

氏名(本籍)	徳田克己(千葉県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第480号
学位授与年月日	昭和63年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	弱視児における漢字の読み書きに関する研究

主査	筑波大学教授	教育学博士	佐藤泰正
副査	筑波大学教授	教育学博士	福沢周亮
副査	筑波大学教授	医学博士	藤田紀盛
副査	筑波大学教授		谷村裕
副査	筑波大学教授		瀬尾政雄
副査	筑波大学助教授		桑原隆

論 文 の 要 旨

弱視児教育において漢字指導は大きな比重を占めており、小学生段階では996字の教育漢字の読み書きの習得をはかる指導がおこなわれている。しかしながら、教育現場からは、小学校学習指導要領に示されている漢字の読み書きの習得をめざすと実際には学習の大部分の時間を漢字指導にあてなければならなくなり、しかもその指導に多くの時間を費やしても学習の成果は必ずしも十分なのではないという指摘がなされている。本論文では、弱視児のこのような漢字学習における困難性を軽減するための資料を得ることを目的として、特別な実験条件を設定せず、実際に実施した漢字テストに現れた現象を分析する手法を使用し、弱視児の学習の困難性の原因と学習の基本的なメカニズムの解明をめざした実証的研究の結果をまとめた。論文は2部8章から構成されており、全体で800字(40字 20行)の原稿247枚から成る。

第1部 緒論では、弱視児の漢字学習に関する先行研究の結果を整理し、また正眼児を対象にした漢字研究の数々の知見をまとめ、それらを比較することによって弱視児の漢字学習のメカニズムの特徴を概観し、加えて弱視児の低視機能が習得度に与える影響とそこから生ずる漢字学習の問題点を整理した。さらに、漢字の読み書きの習得度を規定する要因について正眼児を対象にした多くの先行研究の結果をまとめ、その研究の手法を弱視児に適用する意義について述べた。特に漢字の持つ属性(画数、象形性、規則性、熟知度など)から、弱視児の漢字の読み書きの習得度を検討す

ることの重要性にふれた。

第2部 本論 序章では、本論の構成と各章での分析の観点について述べた。第1章第1節では本章の目的と方法を述べ、第2節では小学校2年生から6年生までの弱視児281名と正眼児459名を対象にして、1年から5年までに配当されている教育漢字の読みのテストを作成、実施して、その習得度を比較した結果をまとめた。また第3節では、弱視児の残存視力による読みの習得度の比較をおこない、さらに弱視児の在籍学校（盲学校、小学校弱視学級）による読みの習得度の比較をおこなった。その結果、弱視児は正眼児に比べて読みの習得度がかなり低く、特に3年生配当漢字の読みの習得に大きな問題があること、弱視児は高学年になるにしたがって残存視力が低い者ほど読みの習得度が低くなること、盲学校弱視児よりも弱視学級弱視児の方が読みの習得度が高いことなどが確認された。加えて第3節では弱視児の持つ眼疾患と読みの習得度の関係を分析した。対象児は4年生から6年生までの弱視児133名であった。その結果、無紅彩症、白子眼、緑内障、眼球振とうの眼疾患を持つ弱視児は読みの習得度が比較的高く、黄斑部変性や視神経萎縮の眼疾患を持つ弱視児はその習得度が低いことが確かめられた。また、黄斑部変性や視神経萎縮の主症状である中心暗点、漢字の読み書きの習得に対して大きなマイナスの効果を持つことを論じた。

第2章では、読みの習得度を規定する要因を、学習者の側面と漢字の側面の両面から検討した。まず第1節では2年生から6年生までの弱視児281名を対象にして、読みの習得度を規定する学習者の要因（視力、視野、学年、在籍学校、心理的要因、生理的要因等）を分析するために、対象児に漢字の読みのテストと47項目からなる5段階の評定尺度を用いたプロフィール調査を実施した。主因子法による因子分析をおこない、47項目を10因子に分類し、それに視力、視野などの要因を加えて、重回帰分析を用いて14の要因から読みの習得度の分散の説明を試みた。その結果、6つの要因（学年、総合的学習能力、触覚行動、視力、在籍学校、虚弱体質）が習得度に対して有意な貢献度を持つことが確認された。第2節では、6年生の弱視児54名、正眼児87名を対象にして、読みの習得度と漢字属性（画数、配当学年、規則性、象形性、使用率）の関係が分析された。偏相関係数の算出および重回帰分析の結果から、弱視児、正眼児ともに、読みの習得度は、配当学年とだけに密接な関係があることが解明された。

第3章では読みのテストにおいて観察される弱視児と正眼児の読み誤りを分類し、その傾向を比較することによって、弱視児の漢字読字学習の基本的なメカニズムを分析した。その結果、弱視児は意味処理あるいは形態処理でつまづきやすいこと、漢字の知識特性、国語表記の知識が十分に学習できていないことが明らかになった。

第4章では、第1章と同一の方法を用いて、教育漢字の書きのテストを実施した。正眼児との比較、在籍学校での比較、眼疾患による比較の結果については、読みとほぼ同様な傾向が認められた。ただし、残存視力の差による習得度の違いは、読みよりも書きの方がかなり小さかった。その理由として、書きの場合は視覚だけでなく筋運動感覚が大きく関与するために、弱視児の低い視覚的機能が及ぼす習得度に対する影響は、読みよりも書きの方が大きいことが論じられた。

第5章第1節の書きの習得度を規定する学習者の要因（視力、視野、学年、在籍学校、心理的要

因、生理的要因など)の分析では、7つの要因(学年、総合的学習能力、在籍学校、触覚行動、視力、目の疲労、内向性)が習得度に対して有意な貢献度を持つことが確認された。また、第2節の書きの習得度と漢字属性の関係の分析では、偏相関係数の算出および重回帰分析の結果から、正眼児の習得度は配当学年とだけに密接な関係があり、弱視児の習得度には配当学年と規則性が深く関与していることが解明された。このことは、弱視児は画数の多い漢字を学習することに多くの困難性を持っているという先行研究の知見をくつがえすものであり、また特に漢字の規則性が習得度に大きく関わっていることが示されたことは、視覚だけでなく、運動感覚を十分に用いての、漢字の規則性に焦点をあてた指導法がより効果的である可能性を示唆していると考えられる。

第6章では、書きテストにおいて観察される弱視児と正眼児の書き誤りを分類し、その傾向を比較することによって、弱視児の漢字書字学習の基本的なメカニズムを分析した。その結果、弱視児は成形処理の能力が低いこと、長期記憶の中にある漢字のプロトタイプがはっきりとしていないことなどが示唆された。

第7章では、従来よりたびたび教育現場から指摘されている。弱視児の書字場面において観察される枠からの文字の逸脱(与えられた枠から文字をはみださせてしまうこと)の問題について、漢字を材料にして検討をおこなった。2, 4, 6年生の弱視児154名と正眼児260名を対象にして、テスト場面での漢字の枠からの逸脱について、両群の逸脱の出現率(逸脱率)の比較をおこない、また漢字属性(画数、規則性、象形性、熟知度)との関係を分析した。その結果、正眼児よりも弱視児の方がかなり逸脱率が高いが、高学年になるにつれて両群とも逸脱率は大きく減少すること、低学年においては、弱視児、正眼児とも画数の多い漢字ほど逸脱させてしまう傾向があり、さらに弱視児では象形性の低い漢字ほど逸脱させる頻度が高いことが確かめられた。

さらに第8章では、本研究を総括し、読みと書きの習得度の関係、漢字読み書き能力と学習者の要因の関係、漢字読み書きの習得度を規定する漢字属性などの点について考察をおこなった。また、学習者の要因を検討した第2節においては、有意な貢献度を示した要因と読み書きの習得度との関連を論ずるとともに、弱視児の持つ要因から漢字の習得度の期待値が求められる重回帰式を作成した。この重回帰式によって個々の弱視児の漢字の習得の目標値を設定できるが、このことは個別化教育の方向に向かう弱視児の指導に大きな意義を持つと考えられる。加えて、従来からの弱視児の漢字研究の中における本研究の位置付けを明確におこない、本論文が明らかにした知見と問題点を今後の弱視児の漢字指導にどのように反映させていくかについて論じた。さらに、弱視教育へのワープロ等の補償機器の導入の問題とその有効性について述べた。

審 査 の 要 旨

本研究は、視機能の低い弱視児が漢字の習得においてどのような問題点を持つかについて組織的に研究したものであり、弱視児の漢字読み書き能力を多くの観点から実証的に分析したものである。

これまで、弱視児の漢字の読み書きに関する研究は教育現場において断片的におこなわれたもの

はあるが、本研究のように総合的かつ体系的におこなわれた研究は過去にない。また研究方法に関しても従来の研究は被験児の数や分析方法などに問題を持つものが多かったが、その点、本研究では被験児の数や研究方法などの点についてもよく工夫されている。しかも本研究は新たな視点から研究がおこなわれ、いくつかの重要な知見が出されている。それらの知見の中には、従来より弱視教育の分野で提唱されてきていることの誤りを指摘しているものもあり、その成果は教育現場からも高く評価される。

第1章から第3章までは弱視児における漢字の読みの問題を扱い、漢字の読みの習得度とそれを規定する要因、さらに読み誤りについて検討をおこなっている。第4章から第7章までは弱視児における漢字の書きの問題を、習得度とその規定要因、および書き誤りの側面から検討し、さらに弱視児に頻繁に観察される枠からの文字の逸脱の問題を扱っている。第8章では弱視児の漢字の読み書き能力について総合的に考察をおこなっている。以下に本論文の特筆すべき点をあげる。

第1には被験児の数の問題である。これまでの弱視児を対象とする研究では被験児が非常に少ないものがほとんどであるが、本研究では我が国の弱視児（随伴障害のない者）の半数以上を対象児として研究を進めている。したがって研究結果の信頼性、妥当性を高く評価することができる。

第2は、弱視児の漢字の習得度を規定する要因を総合的にとらえている点である。従来の研究では漢字の属性のひとつだけを取りあげて弱視児の漢字能力との関係をとらえており、一次的な結果を提出するにとどまっている。しかし本研究では配当学年、画数、象形性、規則性、使用率など複数の漢字属性を扱い、統計的手法により詳細な分析をおこなっている。特にこれまでは、弱視児の漢字の習得度はその漢字の画数と密接な関係があることが指摘されていたが、本研究では漢字の画数よりもむしろ規則性の方が習得度に対して重要な効果を持つことが明らかにされた。また、従来は視力が劣ることと漢字能力の低さを直接的に結びつけている研究が多かったが、氏は視力の劣ることは文字の拡大などによって補われるものであり、むしろ学習量の不足とそこから生ずる学習の非確実性が第一の原因であることを指摘している。

第3は、弱視児の漢字読み書き能力を重回帰分析によって検討し、その予測式を作成して、弱視児の漢字学習能力の予測を可能にしている点である。この結果、弱視児の持つ特性、例えば視力、視野、学年、性格的な特徴、行動面での特徴などから、かなり高い精度で弱視児の漢字読み書き能力を予測できることが明らかになった。この予測式は教育現場において有効に活用できるものであり、個別化教育の流れに向かう弱視教育の中で、ひとりひとりの弱視児の漢字学習の目標値を設定できる点において、たいへん意義深いものである。

第4は、弱視児における漢字書き誤りの一覧表を作成していることである。この一覧表の作成にあたってはたいへんな労力を要したと思われるが、「弱視児はこの漢字をこのように誤る」ということを示したことは、教育現場で指導する教師に対して極めて有用な資料を提供することになる。また、従来から頻繁に指摘されていた、弱視児が枠から文字を逸脱させてしまう現象を我が国で初めて実験的に取り扱った点も特筆すべきである。特に、その実態をまとめるにとどまらず、学年発達の検討、漢字属性と逸脱率の関係の分析をおこなっている点は興味深い。

なお本研究では弱視児が実際にどのように漢字を学習していくかという問題が残されているが、それに関しては今後、学習実験をとりいれて研究を進めていくことが望まれる。

今後の研究の発展に期待する点はあるにしても、上述したように、本研究は心身障害学の研究論文として優れたものであり、特に視覚障害学の発展に寄与するところが大きく、また視覚障害教育に対する貢献も大きいと考える。

以上のことから、本論文は学位請求論文としての水準を十分に満たしているものであると判定する。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認定する。